

火事とポチ

有島武郎

青空文庫

ポチの鳴き声でぼくは目がさめた。

ねむたくてたまらなかつたから、うるさいなとその鳴き声をおこっているまもなく、真赤な火が目^{まっか}に映^{うつ}つたので、おどろいて両方の目をしっかり開いて見たら、戸^とだなの中じゆうが火になつていたので、二度おどろいて飛び起きた。そうしたらぼくのそばに寝^ねているはずのおばあさまが何か黒い布^{きれ}のようなもので、夢中^{むちゆう}になつて戸だなの火をたたいていた。なんだか知れないけれどもぼくはおばあさまの様子^{ようす}がこっけいにも見え、おそろしくも見えて、思わずその方に駆^かけよつた。そうしたらおばあさまはだまつたままでうるさそうにぼくをはらいのけておいてその布のような

ものをめったやたらにふり回した。それがぼくの手にさわったらぐしよぐしよにぬれているのが知れた。

「おばあさま、どうしたの？」

と聞いてみた。おばあさまは戸だなの中の火の方ばかり見て答えようとしなない。ぼくは火事じゃないかと思った。

ポチが戸の外で気持ちがいのように鳴いている。

部屋の中は、障子も、壁も、床の間も、ちがいだなも、昼間

のように明るくなっていた。おばあさまの影法師が大きくそれ

に映って、怪物か何かのように動いていた。ただおばあさまが

ぼくに一言も物をいわないのが変だった。急に唾になつたのだ

ろうか。そしていつものようにはかわいがってくれずに、ぼくが

近寄ってもじやま者あつかいにする。

これはどうしても大変だとぼくは思った。ぼくは夢中^{むちゆう}になつておばあさまにかじりつこうとした。そうしたらあんなに弱いおばあさまがだまつたままで、いやというほどぼくをはらいのけたのでぼくはふすまのところまでけし飛ばされた。

火事なんだ。おばあさまが一人^{ひとり}で消そうとしているんだ。それがわかるとおばあさま一人ではだめだと思ったから、ぼくはすぐ部屋を飛び出して、おとうさんとおかあさんとが寝^ねている離れ^{はな}の所へ行つて、

「おとうさん……おかあさん……」

と思いきり大きな声を出した。

ぼくの部屋の外で鳴いていると思ったポチがいつのまにかそこに来ていて、きんきんとひどく鳴いていた。ぼくが大きな声を出すか出さないかに、おかあさんが寝巻ねまきのままで飛び出して来た。

「どうしたというの？」

とおかあさんはないしよ話のような小さな声で、ぼくの両肩たをしつかりおさえてぼくに聞いた。

「たいへんなの……」

「たいへんなの、ぼくの部屋が火事になったよう」といおうとしたが、どうしても「大変なの」きりであとは声が出なかった。

おかあさんの手はふるえていた。その手がぼくの手を引いて、

ぼくの部屋の方に行ったが、あけっぱなしになっているふすまの所から火が見えたら、おかあさんはいきなり「あれえ」といつて、ぼくの手をふりはなすなり、その部屋に飛びこもうとした。ぼくはがむしやらにおかあさんにかじりついた。その時おかあさんはじめてそこにぼくのいるのに気がついたように、うつ向いてぼくの耳の所に口をつけて、

「早く早くおとうさんをお起こしして……それからお隣となりに行つて、……お隣のおじさんを起こすんです、火事ですつて……いいかい、早くさ」

そんなことをおかあさんはいったようだった。

そこにおとうさんも走つて来た。ぼくはおとうさんにはなんに

もいわないで、すぐ上がり口に行つた。そこは真暗まっくらだった。はだしで土間どまに飛びおりて、かけがねをはずして戸をあけることができた。すぐ飛び出そうとしたけれども、はだしだと足をけがしておそろしい病気になるとおかあさんから聞いていたから、暗やみの中で手さぐりにさぐつたら大きなぞうりがあつたから、だれのだか知らないけれどもそれをはいて戸外そとに飛び出した。戸外そとも真暗で寒かつた。ふだんなら気味が悪くつて、とても夜中よなかにひとりで歩くことなんかできないのだけれども、その晩だけはなんともなかつた。ただ何かにつまずいてころびそうなので、思いきり足を高く上げながら走つた。ぼくを悪者わるものとでも思つたのか、いきなりポチが走つて来て、ほえながら飛びつこうとしたが、すぐ

ぼくだと知れると、ぼくの前になったりあとになったりして、門の所まで追っかけて来た。そしてぼくが門を出たら、しばらくぼくを見ていたが、すぐ変な鳴き声を立てながら家の方に帰っていつてしまった。

ぼくも夢中で駆^かけた。お隣^{となり}のおじさんの門をたたいて、

「火事だよう！」

と二、三度どなった。その次の家も起こすほうがいいと思ってぼくは次の家の門をたたいてまたどなった。その次にも行つた。

そして自分の家の方を見ると、さっきまで真^ま暗^{くら}だったのに、屋

根の下の方あたりから火がちよろちよろと燃え出していた。ぱちぱちとたき火のような音も聞こえていた。ポチの鳴き声もよく聞

こえていた。

ぼくの家は町からずつとはなれた高^{たか}台^{だい}にある官^{かん}舎^し町^{やまち}にあつたから、ぼくが「火事だよう」といつて歩いた家はみんな知つた人の家だつた。あとをふりかえつて見ると、二人三人黒い人^{ひと}影^{かげ}がぼくの家の方に走つて行くのが見える。ぼくはそれがうれしくて、なおのこと、次の家から次の家へとどなつて歩いた。

二十軒^{けん}ぐらいもそうやってどなつて歩いたら、自分の家からずいぶん遠くに来てしまつていた。すこし気味が悪くなつてぼくは立ちどまつてしまつた。そしてもう一度家の方を見た。もう火はだいぶ燃え上がつて、そこいらの木や板べいなんかがはつきりと絵にかいたように見えた。風がないので、火はまつすぐに上の方

に燃えて、火の子が空の方に高く上がって行つた。ぱちぱちという音のほかに、ぱんぱんと鉄砲てっぽうをうつような音も聞こえていた。立ちどまってみると、ぼくのからだはぶるぶるふるえて、ひざ小僧こぞうと下あごとががち音が立てるかと思うほどだった。急に家がいしくなつた。おばあさまも、おとうさんも、おかあさんも、妹や弟たちもどうしているだろうと思うと、とてもその先までもなつて歩く気にはなれないで、いきなり来た道を夢中むちゆうで走りだした。走りながらもぼくは燃え上がる火から目をはなさなかつた。真暗まつくらななかに、ぼくの家だけがたき火のように明るかつた。顔までほてつてゐるようだった。何か大きな声でわめき合う人の声がした。そしてポチの気持ちがいのように鳴く声が。

町の方からは半鐘^{はんしやう}も鳴らないし、ポンプも来ない。ぼくはもうすっかり焼けてしまうと思った。明日^{あす}からは何を食べて、どこに寝^ねるのだろうと思ひながら、早くみんなの顔が見たさにいっしょうけんめいに走った。

家のすこし手前で、ぼくは一人の大きな男がこつちに走つて来るのに会った。よく見るとその男は、ぼくの妹と弟とを両脇^{りやうわき}にしつかりとかかえていた。妹も弟も大きな声を出して泣^ないていた。ぼくはいきなりその大きな男は人さらいだと思った。官舎^{かんしゃ}町の後ろは山になっていて、大きな森の中の古寺に一人の乞食^{こじき}が住んでいた。ぼくたちが戦^{いくさ}ごっこをしに山に遊びに行つて、その乞食を遠くにでも見つけたら最後、大急ぎで、「人さらいが来

たぞ」といいながらにげるのだった。その乞食こじきの人はどんなことがあつても駆かけるということをしなで、ぼろを引きずつたまま、のそりのそりと歩いていたから、それにとらえられる氣づかいはなかったけれども、遠くの方からぼくたちのにげるのを見ながら、牛のような声でおどかすことがあつた。ぼくたちはその乞食を何よりもこわがった。ぼくはその乞食が妹と弟とをさらつて行くのだと思つた。うまいことには、その人はぼくのそこにいるのには氣がつかないほどあわてていたとみえて、知らん顔をして、ぼくのそばを通りぬけて行つた。ぼくはその人をやりすごして、すこしの間どうしようかと思つていたが、妹や弟のいどころが知れなくなつてしまつては大変だと氣がつくと、家に帰るのはやめて、

大急ぎでその男のあとを追いかけた。その人はほんとうに早かった。はいている大きなぞうりがじやまになつてぬぎすてたくなるほどだった。

その人は、大きな声で泣きつづけている妹たちをこわきにかかえたまま、どんどん石垣^{いしがき}のある横町へと曲がって行くので、ぼくはだんだん気味が悪くなつてきたけれども、火事どころのさわぎではないと思つて、ほおかぶりをして尻^{しり}をはしよつたその人の後ろから、氣づかれないようにくつついて行つた。そうしたらその人はやがて橋^{はしもと}本さんという家の高い石段をのぼり始めた。見るとその石段の上には、橋本さんの人たちが大ぜい立つて、ぼくの家の方を向いて火事をながめていた。そこに乞食らしい人がの

ぼって行くのだから、ぼくはすこし変だと思った。そうすると、橋本のおばさんが、上からいきなりその男の人に声をかけた。

「あなた帰っていらしたんですか……ひどくなりそうですね」
そうしたら、その乞食^{こじき}らしい人が、

「子どもさんたちがけんのんだから連れて来たよ。竹男^{たけお}さんだけはどこに行つたかどうかどうも見えなんだ」

と妹や弟を軽々とかつぎ上げながらいった。なんだ。乞食じゃなかったんだ。橋本のおじさんだったんだ。ぼくはすっかりうれしくなつてしまつて、すぐ石段を上つて行つた。

「あら、竹男さんじゃありませんか」

と目^め早くぼくを見つけてくれたおばさんがいった。橋本さんの

人たちは家じゅうでぼくたちを家の中に連れこんだ。家の中には燈火^{あかり}がかんかんとついて、真暗なところを長い間歩いていたぼくにはたいへんうれしかった。寒いだろうといった。葛湯^{くすゆ}をつくつたり、丹前^{たんぜん}を着せたりしてくれた。そうしたらぼくはなんだか急に悲しくなった。家にはいつてから泣き^なやんでいた妹たちも、ぼくがしくしく泣きだすといつしよになって大きな声を出しはじめた。

ぼくたちはその家の窓^{まど}から、ぶるぶるふるえながら、自分の家の焼けるのを見て夜を明かした。ぼくたちをおくとすぐまた出かけて行つた橋本のおじさんが、びつしよりぬれてどろだらけになつて、人ちがいするほど顔がよごれて帰つて来たころには、夜が

すっかり明けはなれて、ぼくの家所からは黒いけむりと白いけむりとが別々になつて、よじれ合いながらもくもくと立ち上つていた。

「安心なさい。母屋は焼けたけれども離れ^{はな}だけは残つて、おとうさんもおかあさんもみんなけがはなかつたから……そのうちに連れて歸つてあげるよ。けさの寒さは格別だ。この一面の霜^{しも}はどうだ」

といいながら、おじさんは井戸^{いど}ばたに立つて、あたりをながめまわしていた。ほんとうに井戸がわまでが真白^{まっしろ}になつていた。

橋本^{あさご}さんで朝御飯^{はん}のごちそうになつて、太陽^{もぎ}が茂木^{べつそ}の別荘^{そう}の大きな榎^{まき}の木の上に上つたころ、ぼくたちはおじさんに連れら

れて家に帰った。

いつのまに、どこからこんなに来たろうと思うほど大ぜいの人
がけんか腰ごしになつて働いていた。どこからどこまで大雨のあとの
ようにびしょびしょなので、ぞうりがすぐ重くなつて足のうらが
気味悪くぬれてしまった。

はな離れに行つたら、これがおばあさまか、これがおとうさんか、

おかあさんかとおどろくほどにみんな変わつていた。おかあさん
なんかは一度も見たことのないような変な着物を着て、髪かみの毛な
んかはめちやくちやになつて、顔も手もくすぶつたようになって
いた。ぼくたちを見るといきなり駆けよつて来て、三人を胸むねのと
ころに抱だきしめて、顔をぼくたちの顔にすりつけてむせるように

泣きはじめた。ぼくたちはすこし気味が悪く思つたくらいだった。変わったといえは家の焼けあとの変わりようもひどいものだった。黒こげの材木が、積み木をひっくり返したように重なりあつて、そこからけむりがくさいにおいといっしょにやつて来た。そこいらが広くなつて、なんだかそれを見るとおかあさんじゃないけれども涙なみだが出てきそうだった。

半分こげたり、びしょびしょにぬれたりした焼け残りの荷物といっしょに、ぼくたち六人は小さな離れはなでくらすことになった。御飯は三度三度官舎かんしゃの人たちが作つて来てくれた。熱いにぎり飯めしはうまかった。ごまのふつてあるのや、中から梅干うめぼしの出てくるのや、海苔のりでそとを包んであるのや……こんなおいしい御飯を

食べたことはないと思うほどだった。

火はどろぼうがつけたのらしいということがわかった。井戸の
つるべなわが切つてあつて水をくむことができなくなつていたの
と、短刀が一本火に焼けて焼けあとから出てきたので、どろぼう
でもするような人のやつたことだと警察けいさつの人が来て見こみをつ
けた。それを聞いておかあさんはようやく安心ができたといつた。
おとうさんは二、三日の間、毎日警察に呼び出されて、しじゅう
腹はらをたてていた。おばあさまは、自分の部屋から火事が出たのを
見つけだした時は、あんまり仰ぎょうてん天して口がきけなくなつたの
だそうだけれども、火事がすむとやつと物がいえるようになった。
そのかわり、すこし病氣になつて、せまい部屋のかたすみとこに床を

取つてねたきりになっていた。

ぼくたちは、火事のあつた次の日から、いつものとおりの氣持になつた。そればかりではない、かえつてふだんよりおもしろいくらいだつた。毎日三人で焼けあとに出かけていつて、人足にんそくの人なんか、じゃまだ、あぶないといわれながら、いろいろのものを拾ひろい出して、めいめいで見せあつたり、取りかえつこしたりした。

火事がすんでから三日めに、朝目をさますとおばあさまがあわてるようにポチはどうしたろうとおかあさんにたずねた。おばあさまはポチがひどい目にあつた夢ゆめを見たのだそうだ。あの犬がほえてくれたばかりで、火事が起こつたのを知つたので、もしポチ

が知らしてくれなければ焼け死んでいたかもしれないとおばあさまはいった。

そういえばほんとうにポチはいなくなってしまった。朝起きた時にも、焼けあとに遊びに行つてゐる時にも、なんだか一つ足りないものがあるようだったが、それはポチがいなかったんだ。ぼくがおこしに行く前に、ポチは離れ^{はな}に来て雨戸をがりがり引つかけながら、悲しそうにほえたので、おとうさんもおかあさんも目をさましていたのだとおかあさんもいった。そんな忠義なポチがいなくなったのを、ぼくたちはみんなわすれてしまっていたのだ。ポチのことを思い出したら、ぼくは急にさびしくなった。ポチは、妹と弟とをのければ、ぼくのいちばんすきな友だちなんだ。居^{きより}

留地^{ゆうち}に住んでいるおとうさんの友だちの西洋人がくれた犬で、
耳の長い、尾^おのふさふさした大きな犬。長い舌^{した}を出してぺろぺろ
とぼくや妹の頸^{くび}の所をなめて、くすぐったがらせる犬、けんかな
らどの犬にだって負けない犬、めったにほえない犬、ほえると人
でも馬でもこわがらせる犬、ぼくたちを見るときつと笑^{わら}いながら
駆け^かつけて来て飛びつく犬、芸当はなんにもできないくせに、な
んだかかわいい犬、芸当をさせようとすると、はずかしそうに横
を向いてしまって、大きな目を細くする犬。どうしてぼくはあ
の
だいじな友だちがいなくなったのを、今日^{きょう}まで思い出さずにいた
ろうと思った。

ぼくはさびしいばかりじゃない、くやしくなった。妹と弟にそ

ういつて、すぐポチをさがしはじめた。三人で手分けをして庭に出で、大きな声で「ポチ……ポチ……ポチ来い^こポチ来い」とよんで歩いた。官舎町^{かんしゃまち}を一軒^{いっけん}一軒^{いっけん}聞いて歩いた。ポチが来てはいませんか。いません。どこかで見ませんでしたか。見ません。どこでもそういう返事だった。ぼくたちは腹もすかなくなつてしまった。御飯だといつて、女中がよびに来たけれども帰らなかつた。茂木^{もぎ}の別荘^{べっしやう}の方から、乞食^{こじき}の人が住んでいる山の森の方へも行った。そして時々大きな声を出してポチの名をよんでみた。そして立ちどまって聞いていた。大急ぎで駆^かけて来るポチの足音が聞こえやしないかと思つて。けれどもポチのすがたも、足音も、鳴き声も聞こえては来なかつた。

「ポチがいなくなつてかわいそうねえ。殺されたんだわ。きっと」と妹は、さびしい山道に立ちすくんで泣きだしそうな声を出した。ほんとうにポチが殺されるかぬすまれでもしなければいなくなつてしまふわけがないんだ。でもそんなことがあつてたまるものか。あんなに強いポチが殺される氣づかいはめつたにないし、ぬすもうとする人が来たらかみつくに決まつている。どうしたんだろうなあ。いやになつちまうなあ。

……ぼくは腹がたつてきた。そして妹にいつてやった。

「もとはつていえばおまえが悪いんだよ。おまえがいつか、ポチなんかいやな犬、あつち行けつていったじやないか」

「あら、それは冗じょうだん談にいったんだわ」

「冗談だつていけないよ」
じょうだん

「それでポチがいなくなつたんじゃないことよ」

「そうだい……そうだい。それじゃなぜいなくなつたんだか知つてるかい……そうれ見ろ」

「あつちに行けつていつたつて、ポチはどこにも行きはしなかつたわ」

「そうさ。それはそうさ……ポチだつてどうしようかつて考えていたんだい」

「でもにいさんだつてポチをぶつたことがあつてよ」

「ぶちなんでしませんよだ」

「いいえ、ぶつてよほんとうに」

「ぶったっていいやい……ぶったって」

ポチがぼくのおもちやをめちやくちやにこわしたから、ポチがきやんきやんというほどぶったことがあった。……それを妹にいわれたら、なんだかそれがもとでポチがいなくなったようにもなってきた。でもぼくはそう思うのはいやだった。どうしても妹が悪いんだと思った。妹がにくらしくなった。

「ぶったってぼくはあとでかわいがってやったよ」

「私だってかわいがってよ」

妹が山の中でしくしく泣き^なだした。そうしたら弟まで泣きだした。ぼくもいつしよに泣きたくなったらけれども、くやしいからがまんしていた。

なんだか山の中に三人きりでいるのが急にこわいように思えてきた。

そこへ女中がぼくたちをさがしに来て、家ではぼくたちが見えなくなったので心配しているから早く帰れといった。女中を見たら妹も弟も急に声をはりあげて泣きだした。ぼくもとうとうむやみに悲しくなつて泣きだした。女中に連れられて家に帰つて来た。「まああなたがたはどこをうろついていたんです、御飯も食べないで……そして三人ともそんなに泣いて……」

とおかあさんはほんとうにおこつたような声でいった。そしてにぎり飯を出してくれた。それを見たら急に腹がすいてきた。今まで泣いていて、すぐそれを食べるのはすこしはずかしかったけ

れども、すぐ食べはじめた。

そこに、焼けあとで働いている人足にんそくが来て、ポチが見つかったと知らせてくれた。ぼくたちもだったけれども、おばあさまやおかあさんまで、大さわぎをして「どこにいました」とたずねた。「ひどいけがをして物置きのかげにいました」

と人足の人はいつて、すぐぼくたちを連れていつてくれた。ぼくはにぎり飯をほうり出して、手についてる御飯つぶを着物ではらい落としながら、大急ぎでその人のあとから駆け出した。妹や弟も負けず劣おとらずついて来た。

半焼けになった物置きが平べったくたおれている、その後ろに三、四人の人足がかがんでいた。ぼくたちをむかえに来てくれた

人足はその仲間なかまの所にいつて、「おい、ちよつとそこをどきな」といったらみんな立ち上がった。そこにポチがまるまって寝ねていた。

ぼくたちは夢むちゆう中になつて「ポチ」とよびながら、ポチのころに行つた。ポチは身動きもしなかつた。ぼくたちはポチを一目見ておどろいてしまった。からだじゆうをやけどしたとみえて、ふさふさしている毛がところどころ狐きつねいろ色にこげて、どろがいつぱいこびりついていた。そして頭や足には血が真黒まっくろになつてこびりついていた。ポチだかこの犬だかわからないほどきたなくなつていた。駆けこんでいつたぼくは思わずあとずさりした。ポチはぼくたちの来たのを知ると、すこし頭を上げて血走つた目

で悲しそうにぼくたちの方を見た。そして前足を動かして立とうとしたが、どうしても立てないで、そのままねころんでしまった。「かわいそうに、落ちて来た材木で腰こしつ骨ほねでもやられたんだろう」「なにしろ一晩じゅうきやんきやんいって火のまわりを飛び歩いていたら、つかれもしたろうよ」

「見ろ、あすこからあんなに血が流れてらあ」

人足たちが口々にそんなことをいった。ほんとうに血が出ていた。左のあと足のつけ根の所から血が流れて、それが地面までこぼれていた。

「いたわってやんねえ」

「おれやいやだ」

そんなことをいって、人足たちも かんびよう 看病してやる人はいなかった。ぼくはなんだか気味が悪かった。けれどもあんまりかわいそうなので、こわごわ遠くから頭をなでてやったら、鼻の先をふるわしながら、目をつぶって頭をもち上げた。それを見たらぼくはきたないのも気味の悪いのもわすれてしまつて、いきなりそのそばに行つて頭をかかえるようにしてかわいがつてやった。なぜこんなかわいい友だちを一度でもぶつたろうと思つて、もうポチがどんなことをしてもぶつなんて、そんなことはしまいと思つた。ポチはおとなしく目をつぶつたままでぼくの方に頭を寄せかけて来た。からだじゅうがぶるぶるふるえているのがわかつた。

妹や弟もポチのまわりに集まつて来た。そのうちにおとうさん

もおかあさんも来た。ぼくはおとうさんに手伝って、バケツで水を運んで来て、きれいな白いきれで静かにどろや血をあらいい落としてやった。いたい所をあらってやる時には、ポチはそこに鼻先を持って来て、あらう手をおしのけようとした。

「よしよし静かにしている。今きれいにしてきずをなおしてやるからな」

おとうさんが人間に物をいうようにやさしい声でこういつたりした。おかあさんは人に知れないように泣^ないていた。

よくふざけるポチだったのにもうふざけるなんて、そんなことはちつともしなくなつた。それがぼくにはかわいそうだった。からだをすっかりふいてやったおとうさんが、けががひどいから犬

の医者をもよんで来るといつて出かけて行つたるすに、ぼくは妹たちに手伝つてもらつて、藁わらで寢床ねどこを作つてやつた。そしてタオルでポチのからだをすつかりふいてやつた。ポチを寢床の上に臥ねしかえようとしたら、いたいとみえて、はじめてひどい声を出して鳴きながらかみつきそうにした。人夫たちも親切に世話してくれた。そして板きれでポチのまわりに囲いをしてくれた。冬だから、寒いから、毛がぬれているとずいぶん寒いだろうと思つた。

医者が来て薬をぬつたり飲ませたりしてから、人足たちもおかあさんも行つてしまった。弟も寒いからというのでおかあさんに連れて行かれてしまった。けれどもおとうさんとぼくと妹はポチのそばをはなれないで、じつとその様子ようすを見ていた。おかあさ

んが女中に牛乳で煮たおかゆを持って来させた。ポチは喜んでそれを食べてしまった。火事の晩から三日の間ポチはなんにも食わずにしんぼうしていたんだもの、さぞおかゆがうまかつたろう。

ポチはじつとまるまってふるえながら目をつぶっていた。目がしらの所が涙でしじゅうぬれていた。そして時々細く目をあいてぼくたちをじつと見るとまたねむった。

いつのまにか寒い寒い夕方がきた。おとうさんがもう大丈夫だから家にはいろうといったけれども、ぼくははいるのがいやだった。夜どおしでもポチといっしょにいてやりたかった。おとうさんはしかたなく寒い寒いといいながら一人で行ってしまった。

ぼくと妹だけがあとに残った。あんまりよく睡ねるので死んではいないかと思つて、小さな声で「ポチや」というとポチはめんどうくさそうに目を開いた。そしてすこしだけしつぽをふつて見せた。

とうとう夜になってしまった。夕御飯でもあるし、かぜをひくと大変だからといつておかあさんが無理にぼくたちを連れに來たので、ぼくと妹とはポチの頭をよくなでてやつて家に歸つた。

次の朝、目をさますと、ぼくは着物も着かえないでポチの所に行つて見た。おとうさんがポチのわきにしゃがんでいた。そして、「ポチは死んだよ」といった。ポチは死んでしまった。

ポチのお墓はかは今でも、あの乞食こじきの人の住んでいた、森の中の寺

の庭にあるかしらん。

青空文庫情報

底本：「一房の葡萄」角川文庫、角川書店

1952（昭和27）年3月10日初版発行

1968（昭和43）年5月10日改版初版発行

1990（平成2）年5月30日改版37版発行

入力：鈴木厚司

校正：八木正三

1998年5月25日公開

2007年8月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

火事とポチ

有島武郎

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>